

2026年度 大学院入試（11月期）（発達心理学専攻・発達心理学コース）

博士課程（前期） 「専門科目」

（2025年11月1日実施）

合否判定の方法 《専門科目》《英語》《口述試験》

専門科目（200点）、英語（100点）および口述試験（4段階評価）により評価する。

合否判定の基準 専門科目：100点以上、英語：50点以上、口述試験：C以上のいずれも満たすこと。

《専門科目》（200点満点）

【1】

出題意図

発達精神病理学に関する基礎的な知識を有しているかどうかを判定する。

正答例

両者は社会規範に反する行動が繰り返し出現する点では共通しているが、①素行障害/素行症には診断の下限年齢が設定されていないが、反社会性パーソナリティ障害/症は18歳以上で診断され子ども期を含まない点異なる。②また素行障害/症の診断には反社会性パーソナリティ障害/症の既往歴は含まれないが、反社会性パーソナリティ障害/症の診断には15歳以前に素行障害/症の症状が見られたというエビデンスが必要である点も異なる。

※上記に加えて【素行障害/素行症の特徴】および【反社会性パーソナリティ症の特徴】それぞれの診断基準・発症リスク要因・介入（治療）・予防について正しく記載されていれば正答とする。

【2】

出題意図

乳幼児期の発達に関する基礎的な知識の習得度を確認する。

正答例

乳幼児期の「遊び」は、認知発達において重要な役割を果たしている。子どもの発達段階に沿った具体的な遊びの例を挙げながら説明する。

1. 感覚運動期の遊びから「見立て遊び」へ（1歳半～2歳頃）

生後間もない時期の遊びは、おもちゃを口に入れたり、叩いて音を出したりする「感覚運動的な遊び」が中心である。1歳半を過ぎる頃から、積み木を耳に当てて「もしもし？」と電話で話をしているような真似をする、細長い棒をスプーンに見立てて人形に食べる真似をするなどの見立て遊びが活発になる。その背景には、「本物のスマートフォン」や「本物のスプーン」の形や機能を頭の中に表象が獲得されていることが求められる。目の前にある全く形の違う「積み木」や「棒」にそのイメージを重ね合わせ、別物として扱うことができる背景には、表象が獲得されてきている様子が見られる。

2. 「ごっこ遊び」による象徴機能の発展（2歳～3歳頃）

2歳を過ぎると、見立て遊びがさらに発展し、例えば、親の真似をしてエプロンを着て料理を作る「おままごと」や、お医者さんになりきってぬいぐるみに注射をする「お医者さんごっこ」などの「ごっこ

遊び」が盛んになる。その背景には、他者の役割や、その人が行う一連の行動スクリプトを頭の中で表象できることが重要である。過去に見た大人の姿を記憶に留め、それを遊びの中で「再現」する（遅延模倣）ことで、表象能力はより複雑で持続的なものへと進化している様子が見られる。

3. 言語やルールを伴う遊び（3歳以降）

3歳を過ぎると、言葉の数が一気に増え、遊びはさらに社会性を帯びていく。言葉自体が「目に見えない意味を表す最大の表象（象徴）」となることは、「ここは病院ね」など、言葉で設定を共有して遊ぶ、あるいは簡単なルールのある絵カード遊びなどが行えるようになる様子からもわかる。このように、目の前にない状況や設定を「言葉」という抽象的な表象を使って他者と共有するようになる。この段階になると、頭の中のイメージを他者とすり合わせながら、協同でストーリーを展開していく高度な表象の活用が可能となっていく。

このように、乳幼児は、実際の経験を、まず「遊び」の中で身体を動かしながら再現している。この「現実を頭の中でイメージに変換し、おもちゃや言葉を使って表現する」という遊びのプロセスそのものが、表象の発達につながっていることがわかる。

【3】

出題意図

発達心理学の研究を実施する際に必要となる統計解析に関する基礎的な理解力、読解力を判定すること。

正答例

（１）自律的動機づけは部活動への適応感との間に弱いから中程度の正の相関を示している一方、他律的動機づけは部活動への適応感とは関連がないか、弱い負の相関を示している。

（２）部活動への自律的動機づけに主将のリーダーシップや部の雰囲気への満足が関係していることから、部員の自律的動機づけを促進するためには、主将が部員を鼓舞したり、気遣ったりすることを通して、リーダーシップを発揮することが必要であると考え。主将のリーダーシップと部の雰囲気への満足感が関連していることから、主将がリーダーシップを発揮できるように、他の部員もお互いに協力したり、話し合ったりすることを通して、部の雰囲気をよくするように試みることが大切であると考え。

図表出典

外山美樹・湯立（2019）。大学運動部活動における部員の自律的動機付けが部活動への適応感に及ぼす影響—主将のリーダーシップを調整変数として。教育心理学研究, 67, 175-189.から一部抜粋

【4】

出題意図

記憶の発達とは認知発達の基本的事項の一つであること、記憶の発達研究の中心は、記憶のパフォーマンスがなぜ発達するのかという、発達の原因（メカニズム）を明らかにすることであり、それは発達心理学の他の分野にも共通する基本的な事柄であることから、出題をした。

正答例

就学頃の年齢とともに記憶能力が発達し、各種記憶課題のパフォーマンスが向上する。

この時期に記憶能力が発達する原因として、記憶方略の獲得、メタ認知の発達、関連知識の獲得が関係する。

* 記憶方略の獲得：リハーサル、体制化、ストーリー化やイメージ化など。

* メタ認知：自分はどのくらい記憶できるか、課題がどの程度の記憶負荷を必要とするか等を認識することができるようになる。

* 関連知識の獲得：記憶の対象になっている分野について知識をもっていることが記憶には有利であり、各種知識を獲得することで記憶のパフォーマンスが向上する。

また、幼児期から児童期初期においても、実験者が課題状況を工夫することで、子どもは日常生活で獲得している記憶のためのリソースを利用でき、パフォーマンスを伸ばすことができる。例えば、買い物場面を設定し、何を買いたいか店の人に告げる状況を作ること、実験室的な設定よりもパフォーマンスが向上する。